



No.69 2005.12

中央図書館開館 25 周年記念

本学出身作家

# 谷甲州氏講演会開催

本学土木工学科卒業の作家谷甲州氏の講演会を11月22日大宮キャンパス121教室で開催しました。「わが青春の山と文学と」と題した内容で2時間熱く語っていただきました。

講演は、まず数十年ぶりに訪れた懐かしくまた変貌を遂げたキャンパスと、一方それでも変わらない大学の雰囲気についての感想からはじまりました。そして1979年に奇想天外・新人賞の受賞からスタートして26年間、75作累計発行部数200万冊におよぶご自身の小説家となるまでの、主として青春時代を中心に、今回の講演テーマともなっている山、海外でのさまざまな体験を興味深いエピソードを交えて、講演は展開されました。

読書好きの少年は、小中学生の頃から小説や山への興味を持ちはじめ、高校生になって小説の執筆にチャレンジし始める。大学には講義だけでなく、身体を動かして技術を身につけたいと本学に入学し、ワンダーフォーゲルと小説の執筆に没頭。卒業後は建設会社に就職したが、雄大な自然のもとで自分の可能性を試したいと大学で学んだ測量の技術を生かして、海外青年協力隊へ。派遣先のネパール等ではヒマラヤの高峰を制覇するほか、アジア・アフリカを放浪。命の危険にさらされる等さまざまな経験が、他にはないリアリティを小説に加え、小説家としての確固たる地位を築かれた。そして最後に好きなことを仕事にできた自分は幸せであると結ばれた。

そんな氏の興味深い話に、約150人の参加者は時には感動し時には爆笑等、大変熱心に聞いていただきました。2時間という時間はアツという間に過ぎ好評のうちに講演会は終了しました。

谷甲州氏 1951年兵庫県伊丹市生 本学卒業後  
国際協力事業団派遣専門家等を経て執筆活動に専念。  
著書に「白き嶺の男」(新田次郎文学賞受賞)ほか  
多数



目次	
谷甲州氏講演会	1
中央図書館開館25周年記念展示会	2
「行間」を読むと「舞台」が見える ( 椋平 淳 )	3
図書館が変わりました Part2	
染付陶額の展示	4

## 中央図書館開館25周年記念展示会

工大中央図書館が出来てから今年でちょうど25年です。それを記念して4つのテーマで展示会を開催しました。

### ①「大阪工大の歴史・図書館の歴史」展

工大および図書館の歴史を年誌や広報紙の記事からとらえ、我々のある現在を確認し、未来を展望した。

### ②「本学出身の作家・谷甲州」展

新田次郎文学賞受賞の作家・谷甲州氏の作品・愛用の登山靴など氏の所用品、ビデオ・写真等で氏の全貌に迫った。

### ③「本学出身の芸術家たち」展

本学出身の芸術家の作品を展示し、本学における作品の所在を示し、一望できるようにするとともに作者の簡単な紹介を行なった。

### ④「希覓本」展

本学および摂大所蔵の14～16世紀刊行の建築書や地図を展示。

城北祭の期間も含め11月3日～11月22日の間、図書館4階第2閲覧室で実施しました。好評につき予定を大幅に延長し約450人の来場者がありました。



入場者の感想 ■大阪工大の新しい発見があり、歴史を深く知ることができ、驚く事が多かったです ■谷さんの資料には感心しました ■大阪工大出身の卒業生の作品がとてもきれいで、印象に残りました ■年に一度色々な展示をしてください等多くの感想をいただきました。ご来場ありがとうございました。

# エッセイ

## 「行間」を読むと「舞台」が見える



知的財産学部 助教授 椋平 淳

私が「演劇をしている」という話をすると、たいていの学生さんはとても驚きます。無理もないですね。皆さんからみれば、私は単に英語科目の教員ですから。でも、もともとの研究分野は、欧米や日本の演劇です。また、研究だけでなく、実際の上演にも関わっていて、演出やプロデューサーの仕事もしています。

舞台作品を創るために重要なのは、本、つまり「戯曲」を読む力です。舞台上でセリフを吐く俳優だけではなく、稽古現場を仕切る演出家や、企画全般の責任者であるプロデューサーも、戯曲の「潜在力」を読み取れなければ、魅力ある作品を創ることはできません。その潜在力を読み取る際に求められるのが、「行間を読む想像力」です。

演劇の戯曲では、登場人物の心情や動機が、小説ほどには詳しく書かれません。たとえば、2人の登場人物が出会った際、お互いに一言ずつ「やあ」と言ったとします。この場合、2人とも相手を歓迎しているのか、一方が実は相手を避けているのか、あるいは両方とも内心は困惑しているのかは、このセリフだけでは判断できません。たとえ前後の会話をたどったり、さらには全編を読み返してみても、セリフやト書きを表面的に理解するだけでは、欲しい情報が得られないこともしばしばです。それでも、その人物の心の奥底が観客に伝わるように舞台化しなければ、演劇は成立しないのです。とくに、激しいアクション芝居ではなく、会話を主体とする作品なら、なおさらそうです。

したがって、私が上演にむけて戯曲を読むときは、表面的な意味だけでなく、書かれていない「行間」も読み込みます。つまり、なぜその人物がその瞬間にそんな言葉を吐いたのか、書かれたセリフをヒントにして、内面的な心の流れや動機を想像するんですね。対話の場面だと、お互いの感情が連鎖反応を起こしてやたらと盛り上がるとか、逆に、一方に別の動機が芽生えてセリフのトーンが変化するとか、そういう劇的状況を推測して、それが表現できる演技を俳優に求めるわけです。俳優がその人物の内面を自分のものにできたとき、セリフの棒読みが解消され、奥深い演技になるわけです。

この「行間を読む」という行為は、なにも演劇に限ったことではないように思えます。たとえば、どこかの作業場で、いろいろな原材料を並べて眺めながら、その配合や処理の方法をあれこれ想像することで、これまでになかった工業材料が発明されることもあるでしょう。新たな製品が、「社会」という舞台に出るわけですね。というわけで、なにかの「行間を読む」、つまり「潜在力を見出す」というのは、いろいろな「ものづくり」の場面に応用できる視点だろうと思います。

# 図書館が変わりました Part2

前号でもお知らせしたとおり、図書館では施設のリニューアル工事(工事期間7月～9月)を重ねて、さらに図書館が大きく変わりました。前号に引き続き、誌上で公開します。

## 照明改修工事

Before



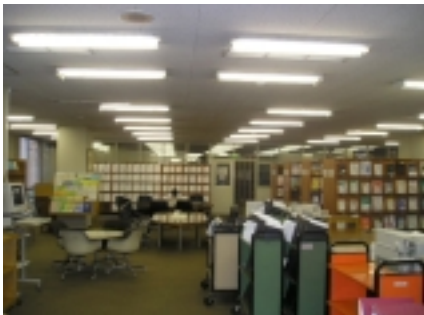
After



4F第1・第2閲覧室、3F参考図書室等、2F学術雑誌室等、階段・廊下等の照明を取り替えました。皆さんからも大変明るくなったと好評です。

## 学術雑誌室カーペットの張替え・照明改修工事

Before



After



永年の使用で傷んでいた床カーペットを全面的に張替えました。色はエーゲ海を思わせるブルーです。文献調べに疲れた利用者を癒す色調です。利用者もゆったりした気分で学習しています。その他、トイレ改修、壁塗装工事を実施し8号館全体が明るくなりました。

玄関ロビーに展示  
染付陶額 大宮本館



陶芸家松風栄一氏の染付陶額「語らい」が展示されました。松風氏は文部大臣賞等を受賞された有名陶芸家です。なお作品は、松風緑子氏より御寄贈いただいたものです。

大阪工業大学図書館報「ぱびろにくす」  
No.69 (2005.12)  
編集発行 大阪工業大学図書館  
〒535-8585 大阪市旭区大宮5丁目16番1号  
TEL 06-6954-4108  
FAX 06-6953-9499  
<http://www.oit.ac.jp/japanese/toshokan/index.html>